かさじぞう

むかしむかし、山の中におじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんとおばあさんはうちでかさを作っていました。あしたはお正月です。新しい年がはじまります。でも、おじいさんとおばあさんはお金がなかったから、お正月のおもちもありませんでした。二人はかさを売って、おもちを買うつもりでした。

おじいさんはかさを持って、町に売りに行きました。でも、だれもかさを買いませんでした。おじいさんはかなしくなりました。

おじいさんは長い山道を歩いて帰りました。雪がたくさんふっていました。

「あっ！ おじぞうさんだ！」

雪の中におじぞうさんが六つ立っていました。

おじいさんは「おじぞうさん、さむくありませんか。」と聞きました。

おじぞうさんは何も言いませんでした。

「どうぞかさを使ってください。」

おじいさんはおじぞうさんのあたまの上にかさをかぶせました。

「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ。」

かさは五つでした。一人のおじぞうさんはかさがありませんでした。

おじいさんは自分のかさをとりました。

「このかさは古いですが、どうぞ。」と言って、おじぞうさんにかぶせました。

うちに帰って、おじいさんはおばあさんにおじぞうさんの話をしました。

おばあさんは「おじいさん、いいことをしましたね。」と言いました。

その夜おそく、おじいさんはだれかの声を聞きました。

「おじいさん、おじいさん。」

おじいさんは戸を開けて、びっくりしました。六人のおじぞうさんが立っていました。おじぞうさんはお正月のおもちをたくさん持っていました。

お正月の朝になりました。おじいさんとおばあさんはおもちをたくさん食べました。二人はとてもしあわせでした。